

# 大聖堂のある街で

第7話

見ているのは月だけ



堀田耕介

## 病院

市庁舎の前は大騒ぎになっていた。正面の入口の前に人だかりがして、市庁舎の中からも窓を開けて大勢の人が下を見ていた。広場で物を売っている人たちも心配そうにその様子を見ていた。その中にはアイスクリームを売っているキリヤもいた。

「あ、ユキちゃん！大変だよ！お父さんが落ちたんだ！」

ぼくを見つけたキリヤが叫ぶ。

「お父さん！」

ぼくは人だかりをかき分けて行った。

「通してください！お父さん！」

もう救急車は来ていて、誰かが運ばれて行くのが見えた。ぼくはなかなか近付けない。

「待ってください！通してください！」

救急車の後ろから、女の子が乗り込むのが見えた。ぼくが行く前に、救急車のドアは閉められ、サイレンを鳴らして救急車は走って行ってしまった。

「おう、ユキちゃん。たいへんなことになったな、お父さんが。」

顔見知りの時計職人が言う。

「誰かついて行った？」

「ああ、セブの制服を着た女の子が、一緒に乗って行ったぞ。」

えっちゃんだ。

「病院はどこですか？」

「植物園の向こう側の、病院街だ。そんなに遠くない。」

ぼくは走り出そうとした。ふわっとした匂いがぼくを抱いた。

「大丈夫、落ち着いて。」

ぼくは泣きそうになってカスミに言った。

「うん。」

病院街のいくつもの病院はみなレンガ造りで、街の中でもそこだけ雰囲気違った。ぼくはカスミに肩を抱かれて、教えられた一番大きな病院に行った。入口で名前を言うと、病室を教えてください

た。迷路のような病院を、カスミは迷うことなく歩いて行った。ぼくはただ、カスミについて歩いて行った。お父さんの病室は4階だった。暗い病棟の廊下を歩いて、お父さんの部屋に入ると、お父さんはもう処置が終わっていて、ベッドで静かに寝ていた。頭にも包帯を巻いて、大きなけがをしているみいだった。えっちゃんがお父さんの顔に額をあてて、泣いていた。

「えっちゃん。」

えっちゃんは立ち上がって、ぼくを抱きしめた。

「ユキちゃん…」

「お父さんは？」

「大丈夫、足は骨折したし、あちこちけがはしたけど、命に別条はないって。」

「よかった。」

ぼくは力が抜けた。カスミがそつと寄り添った。

「カスミちゃん、ありがとう。ユキちゃんについてくれて。」

えっちゃんはカスミに頭を下げた。

「ユキちゃんは大丈夫よ、しっかりしているから。」

カスミはえっちゃんに微笑んだ。えっちゃんはぼくに椅子をすすめて、

「カスミちゃん、ちよつといい？」  
と言った。カスミはうなずいた。

「ユキちゃん、私たち紅茶もらってくるから、お父さんについてあげてね。」

「うん。」

二人は病室を出て行った。ぼくはお父さんのベッドの横に座っていた。お父さんお父さん。どうして急に落ちたりしたんだろう。疲れていたんだろうか。

毎日お父さんが働くのを見ていたけど、そんな感じはしなかった。昨日の夜はえっちゃんが来ていて、やっぱ遅くまで話していた。いつもと変わりがあ  
るわけではなかったのに。何があったんだろう。

ぼくは病院の窓から外を見た。もう暗くなりかけている空の中に、市庁舎の屋根が見えた。足場に掛けられていた幕が、一つの角が外れてぱたぱたと風になびいている。その向こうには小さく、大聖堂の屋根が見えた。そしてその向こうにあるのは、

夕焼けだった。

やがて二人が戻ってきた。カスミは、紅茶のポットとカップを三つのせたお盆を持って、えっちゃんが椅子を二脚持っていた。えっちゃんは折りたたみの椅子を広げて、カスミにすすめた。カスミは頷いて、でも立ったまま紅茶を注ぎ、ぼくたちに渡した。温かい紅茶が、夏だというのに冷えた心に沁みわたって行った。

「こうして三人で話すのは初めてね。」

えっちゃんと言った。

「三人じゃない、四人だよ。」

ぼくはおとうさんを見ながら言った。

「そうだね。」

えっちゃんはちよつと笑って言った。

「えっちゃんは、ユキちゃんのいとこ？」

カスミは尋ねた。

「ううん。ユキちゃんのお父さんの、一番下の妹なの。」

「年が離れているんだね。」

「うん。17歳下。」

カスミは何でそんなこと聞くんだらう。ぼくはえつちやんのこと、話したことあったのに。その時、お父さんは苦しそうにうめいた。

「お父さん、大丈夫？」

ぼくが駆け寄るより早く、えつちやんがのぞきこんだ。

「お兄ちゃん、大丈夫だからね。えつこもユキちゃんもいるから。」

お父さんの口が動いたけど、言葉にはならなかつ

た。えっちゃんの色が少し変わって、元に戻った。

「ね、ユキちゃん。」

「何？」

「ずっとカスミちゃんにいてもらうわけにいかないし、私はここにいるから大丈夫だから、送ってきてあげて。病院の食堂はまだ開いているから、ご飯も食べられるし。」

「えっちゃんは？」

「そうね。ユキちゃんが戻ってきたら交代しよ。」

「でもお父さんが。」

「大丈夫。苦しそうな顔はしているけど、麻酔で眠っているだけだから。」

ぼくはお父さんのことが心配だったけど、確かにもうカスミと一緒にいられる時間ではないと思った。ぼくがカスミを見ると、カスミもうなずいて立ち上がった。

「じゃあえっちゃん、お大事に。」

「ありがとう。いてくれて、心強かったわ。」

「ううん。」

ぼくたちは病室を出た。ぼくはご飯を食べる気がしなかった。カスミはぼくの手を握って言った。

「ね、屋上に行かない？」

「屋上に？行けるの？」

「うん。私、病院の中には詳しいから。こっちよ。」

カスミはぼくを引っ張って、病棟の奥へ歩いて行き、大きな鉄の扉を開けると、そこは非常階段になっていた。中の廊下も古めかしいけど、上に上る階段はさらに埃っぽくて、踊り場の窓は少し開いていた。

屋上に出るドアのノブを回すと、鍵はかかかっていなかった。屋上は思ったより広々していて、空にはいつの間にか雲が出ていた。雲の切れ間に、銀色の月が見えた。三日月より少し太って、でも半月にはなっていないかった。

ぼくたちは市庁舎の見える側に行った。まわりには厚いレンガの1メートルくらいのフェンスがあつて、ぼくたちはそこに手を突いて市庁舎の時計を見た。目の下には黒々と植物園が広がっていて、市庁舎の向こうには遠くに小さく大聖堂の屋根が旧市

街の明かりに照らされてぼんやりと浮かび上がっているのが見えた。

カスミは黙っていた。

「ごめんね、心配かけて。」

ぼくは言った。

「ううん、私こそ。お父さん、心配なのに。」

カスミは答えた。

「うん。慣れた仕事のはずなのにさ。あんな所から落ちるなんて、どうしたんだろう。」

ぼくは月を見た。カスミは月を見ているぼくを見

ていた。

「ねえ、えっちゃんって、どういう人？」

ぼくは振り返った。

「どういう人って、どういうこと？」

カスミは困ったような顔をした。

「ううん、何でもない。ごめんなさい。」

カスミはまた月の方に視線をやった。

「えっちゃん、いい人だよ。」

「そうよね。」

「でも…」

「でも？」

カスミはあわてないように、ゆっくりとぼくの方を見たようだった。

「でも、カスミちゃんと付き合うなって言った。ぼくがカスミちゃんのこと好きなの、知ってるのに。」

カスミはまた前を向いた。ぼくはカスミの方を見た。月の光に、カスミの顔は少し笑っているように見えた。

「私がいずみちゃんと付き合ってたの、知ってたからね。」

「ぼく、わからない。カスミちゃんのこと、好きになつていいの？」

カスミは微笑んだ。

「だめって言ったなら、嫌いになれる？」

「そんなの…」

ぼくは口ごもった。

「そうでしょ？私だってユキちゃんのこと好きよ。どこにいたってユキちゃんのこと考えると、自然に胸がどきどきしてくる。ユキちゃんのこと好きになるのやめろって言われたって無理よ。だって、好きになっち

やったんだから。好きになる前にはもう戻れない。」  
ぼくの胸にさびしいような、嬉しいような、温かい  
ような、冷たいような、何もかもが入り混じった感  
情が急に起こった。ああ、たぶんこれが恋っていう  
感情なんだな、と思った。リカに教えられるなんて  
しやくだったけどさ。

「だからいいのよ、好きで。今はね。未来のことは、  
まだ分からない。大人になったら、昨日と同じよう  
に明日が続いて行くだろうけど、私たちは、明日の  
自分がどうなるかなんてわからないんだから。」

「でも！」

ぼくは思わず言った。

「ぼくはカスミちゃんのことを好きなんだ！」

ぼくは泣きそうになった。カスミは優しくぼくを抱きしめてくれた。

「ありがとう。そう言われると、私も自信が出て来るわ。明日もその次の日も、ユキちゃんを好きでいられるんじゃないかって。」

「自信が出て来るの？」

「うん」

「だったらぼく、ずっとカスミのこと好きでいるよ！  
そうすればカスミもぼくのこと好きでいてくれるん  
でしょ？」

「ふふ。」

カスミは嬉しいような、困ったような顔をした。

「ありがとう。またどきどきして来ちゃった。」

カスミはぼくを強く抱きしめた。ぼくの肩のあたりに、カスミの丸くて弾力のある胸が二つ、おしつけられた。ぼくはカスミの匂いに、満たされて行く感じがした。

「カスミちゃん…」

「なに？」

「なぜなのかな、カスミちゃんとキスしてから、お母さんのことを思い出すようになったんだ。」

「お母さんのこと？」

「うん。3年前にいなくなった。」

「いなくなった？」

カスミはぼくの肩を抱いたまま、顔を少し離して、ぼくの顔を見た。ぼくは視線を落したまま、カスミの胸の間が目に入った。

「しばらく寝込んでたと思ったら、3年前の雪の日、いなくなってたんだ。お父さんはおばあちゃんのこところへ行ったからすぐ帰って来るって行ってたけど、一度だけ手紙をくれたんだけど、それから帰って来ないんだ。お父さんはそれ以来お母さんのことは教えてくれない。ぼくもずっと、お母さんのことは忘れてようと思ってたんだ。だけどカスミちゃんとキスしてから、よくわからないんだけど、お母さんのことを思い出すようになって、苦しくて。」

「そうなの…」

カスミは目を開いて、ぼくの心の中を見るような眼をした。心の中のさびしさとか暗さとか、すべてがカスミの視線にさらされているような気がした。

「それで思い切って、このあいだえっちゃんに聞いたんだ。そしたらえっちゃん、お母さんには恋人ができて、出て行ったんだって言うんだ。」

「お母さんに恋人……？」

カスミは不思議そうな顔をした。

「うん。ぼくも信じられない。でも、お母さんだって人間なんだから、お父さんの他に好きな人ができ

ることだってあるかもしれないと思う。でも、何が本当なんだか、ぼくにはよくわからないんだ。」

カスミはぼくから体を離して、月を見た。カスミと抱き合っていたぼくの体は、そこだけ夜風にひんやりした。

「お父さんにも、えっちゃんにも、秘密があるのね。」

「秘密？」

カスミはぼくの方を見て首を振った。

「もちろん、私にもよくわからないわ。でも……」

カスミはぼくの体をまた抱きしめた。

「ユキちゃん。」

「何？」

「キスしていい？」

「こんなところで？」

「大丈夫。見ているのは月だけよ。」

「ぼくとカスミちゃんと、月と空と。」

「うん。」

ぼくは目を閉じた。カスミが近づいた。唇と唇が触れた。カスミはぼくの肩越しに、ぼくを抱いた。

ぼくは気が遠くなっ  
ていくような感じが  
した。あの日に見た、  
どこかの草原の風景  
が頭の中に浮かんだ。

「お母さんに会いに行こう」

カスミの声  
がした。ぼくと唇と唇を  
合わせているはずの  
カスミの声が。ぼくは  
カスミの体の中に溶け  
て行く感じがした。

大聖堂のある街で 第7話 見ているのは月だけ

<http://p.booklog.jp/book/45485>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45485>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45485>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.